

# 芦別市上芦別町施設内にて捕獲されたマムシ幼蛇について

酪農学園大学 吉田圭太・浅川満彦

## 材料と方法

今回、鑑定対象とした個体は、2016年10月、芦別市上芦別町の家屋内にて捕獲された。酪農学園大学野生動物医学センターWAMCに鑑定のため搬入後、外部計測、肉眼および実体顕微鏡下で観察を行い、種を同定した。また、内外寄生虫についても実体顕微鏡下で精査した。

## 結果と考察

外部計測の結果は、全長 215mm、体重 5g であった。背側の体色は赤褐色で、暗褐色で縁どられた銭形斑が両体側に認められ、尾端はオレンジがかった明色であった（図 1）。腹側には不規則な黒斑が密に認められた（図 2）。体鱗列数は 21 列で、鱗にはキール（稜線状のすじ）が認められた。鼻孔と眼の間にはピット器官の穴があり、口腔内上顎には折りたたみ式の毒牙が認められた（図 3）。

これらの特徴（徳田, 2015）から、本個体はニホンマムシ（*Gloydius blomhoffii*）と同定した。尾端が明色であることは、本種の幼体の特徴であり、これは成長とともに暗色化していく。本種は 8～10 月に卵を胎内で孵化させて子を産む胎生種である（関, 2008）。本個体は、その尾端の色と全長から、産出直後の個体であると考えられた。また、体表、口腔内、臓器、消化管について実体顕微鏡下で検査したが、寄生虫は検出されなかった。

本種は北海道産在来種ヘビ類で唯一の有毒種であり、強い毒を持つため注意が必要である。本種に咬まれる事故は国内で年間 1000～3000 件発生しているといわれ、数人程度ではあるが、治療遅れによる死亡事例も含まれる（徳田, 2015）。また、札幌市内の散歩中のイヌが、鼻部を咬まれ、緊急的な血清治療が施された症例もある（浅川, 未公表）。このように、本道においても、近年、目撃例あるいは咬傷例が増えているような印象を呈すので、市民への注意喚起が必要であろう。

## 謝辞

本分析は、WAMC 運営のために補助された文部科学省私立大学戦略拠点事業（酪農学園大学大学院 2013 年～2017 年）の一環でなされた。

## 引用文献

- ・徳田龍弘, 2015. 改訂版 北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑. 北海道新聞社, 札幌: pp.40-47
- ・関慎太郎, 2008. 身近な両生類・はちゅう類観察ガイド. 文一総合出版, 東京: p.61



図 1. 今回捕獲されたニホンマムシ (*Gloydus blomhoffii*)

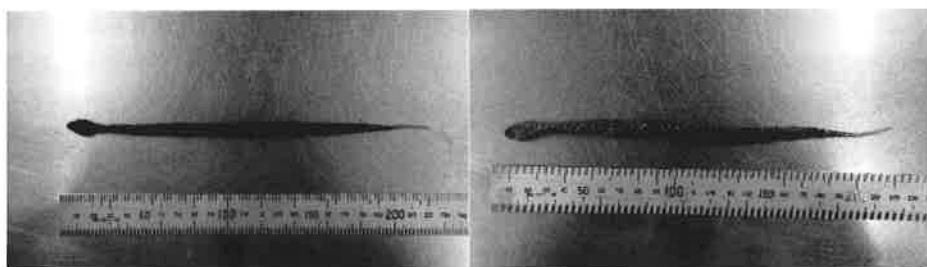


図 2. 左：背側, 右：腹側



図 3. 鼻孔と眼の間のピット器官と上顎の毒牙